

その前で、一瞬立ち止まった。

僕はなつかしそうに見てまわった。  
僕が中学一年の時、たえちゃんは三年だった。

なぜか、昔はそんなに気にもしていなかったのに、  
この歳になり、なにか、なつかしく感じることはかりだった。

もう、昔のように、ズケズケと、遠慮せんと、  
家に入るわけには行かんようになった事が  
変にさびしい思いだった。

そして、やっと、健ちゃんの家のある、  
川島織物工場の横の路地にたどりついた。

ひさしぶりに、小学校時代遊び慣れた「横手」についた。  
しかし、誰もいない。

「皆、どうしているかなあ。」と思いつつ、

「まず、健ちゃんどこ。」と思い、  
「御免ください。」

「御免下さい。  
いいひんのかなあ。」

と、三度目は少し大きな声で言った。

すると、耳の遠いおっさんが  
障子を開けて顔を出した。

「あのお、健ちゃんいやはりますか。」

女って、鋭いなあ